

『カクキューの八丁味噌を愛した著名人』
～ 三田 平凡寺 (みた へいぼんじ) ～

1876年(明治9年)～1960年(昭和35年)
東京都出身。珍品蒐集家。我楽多宗祖。易学者。

子供の頃の事故で鼓膜を破り聴力を失い、それ以降は会話に筆談を用いましたが、絵・川柳・狂歌・漢詩・易学などを学び才能を発揮しました。また日本に入って間もないローラースケートを購入し楽しんだ事でも話題を呼びました。

絵馬・土俗玩具・干支玩具などを蒐集し趣味山平凡寺を名乗り、1919年(大正8年)に全国に会員を募り我楽多宗を設立しました。会員に旧福井藩主松平康莊侯爵・人類学者スーアル・岡崎市の稲垣豆人らがいます。稲垣はのちに松井弘らと岡崎趣味会を発足させ郷土史研究に影響を及ぼしました。

我楽多宗と趣旨を同じくして、大正後期に関西で高橋好劇が中心となり浪華趣味道楽宗が設立されました。会員に川崎巨泉がいます。

三田平凡寺は夏目漱石を尊敬し「吾輩は猫である」のパロディ「吾輩も猫である」を著しました。平凡寺の末娘は夏目漱石の長男と結婚し、その間に誕生されたのがマンガコラムニスト夏目房之介氏です。2024年(令和6年)複数の著者と共に「非凡の人 三田平凡寺」を出版されました。


当社史料室には昭和時代に三田平凡寺に味噌をお送りした記録が残っています。宛先は東京都芝区。嶋村博氏が著した2024年(令和6年)発行の「みどりや主人の大正・戦前昭和」に松井弘が三田平凡寺を訪問し筆談を交わした様子などが紹介されています。

また、当社史料室には大正時代に高橋好劇から17代当主早川久右エ門宛に送られた年賀状も残っています。

「松井弘」「川崎巨泉」については当社ホームページの「カクキューの八丁味噌を愛した著名人」の「松井弘」「川崎巨泉」をご覧ください。

宅扱送状

岡崎八丁味噌本家

 早川久右工門商店

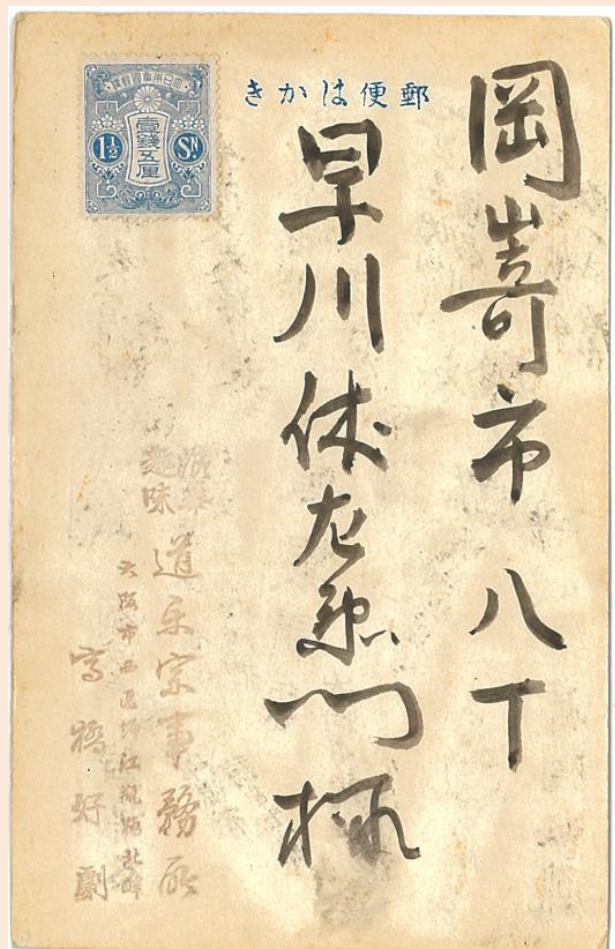
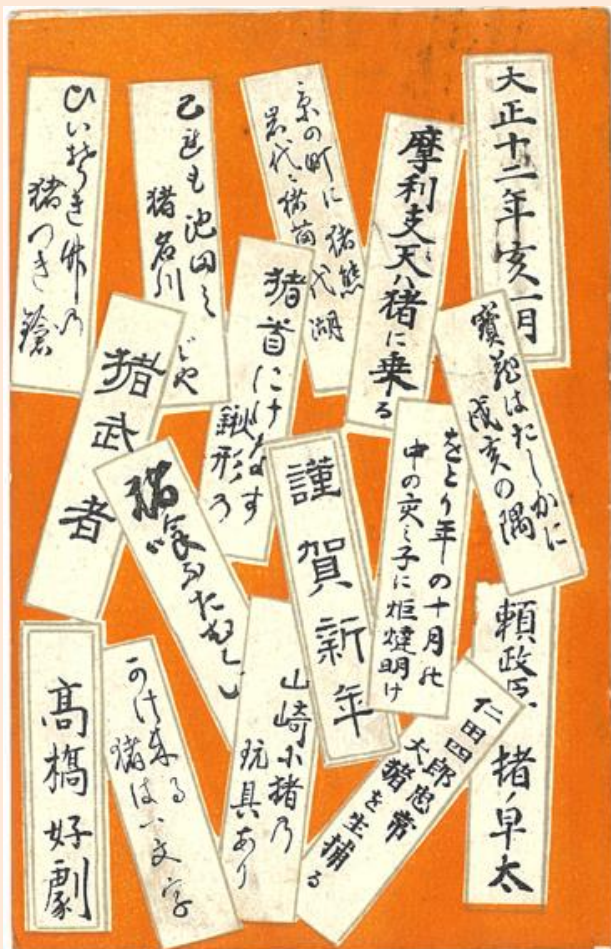
電話九番

No. 昭和 11 年 12 月 26 日

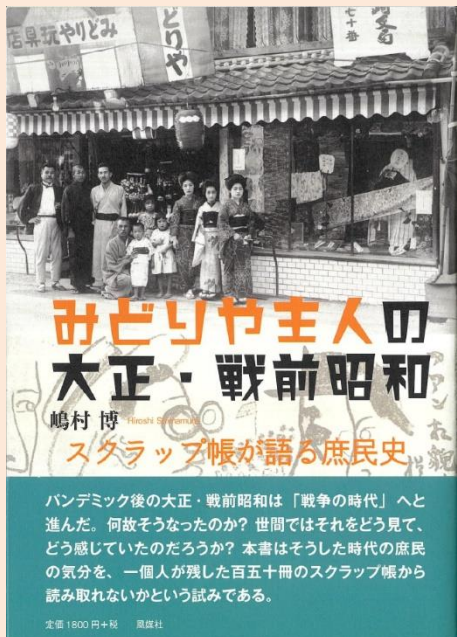
品名荷造	個数	買数	荷受人	着驛	運賃	引換代金	摘要
八丁味噌	341	1.500	[Redacted]	八丁	56		
八丁味噌	4	4	[Redacted]	八丁	56		
八丁味噌	4	4	三田平凡寺	八丁	56		
八丁味噌	4	4	[Redacted]	八丁	56		
八丁味噌	4	4	[Redacted]	八丁	56		
八丁味噌	4	4	[Redacted]	八丁	56		

三河鐵道運送部 電話七二七番 八五一番

三田平凡寺に味噌を御送りした記録 (昭和 11 年 12 月 26 日)



高橋好劇からの年賀状 (大正 12 年 1 月)



みどりや主人の大正・戦前昭和

嶋村博

スダラップ帳が語る庶民史

パンデミック後の大正・戦前昭和は「戦争の時代」へと進んだ。何故そうなったのか？世間ではそれをどう見て、どう感じていたのだろうか？本書はそうした時代の庶民の気分を、一個人が残した百五十冊のスダラップ帳から読み取れないかという試みである。

定価 1800 円＋税 風媒社

2 大正九年 京浜の趣味人たち

みどりや主人・松井弘のスダラップ帳は大正九（一九二〇）年から始まっている。このとき松井は三十歳、「みどりや」を創業する前年で、新愛知新聞岡崎支局長であった。

帳に「京浜旅行の巻 大正九年六月十七日夜出發 六月二十一日朝帰着 菅甲房主人」と記してある。

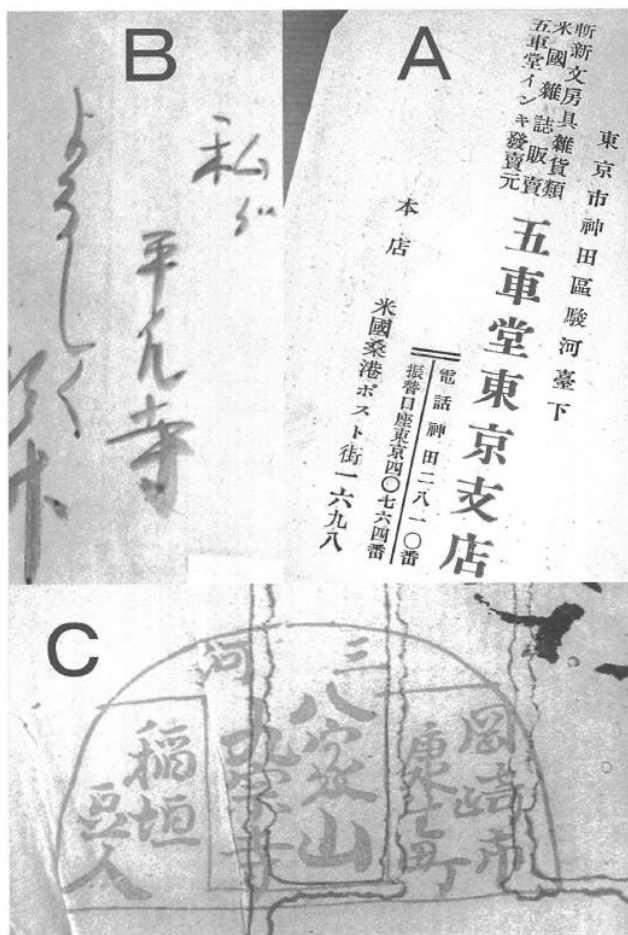
旅行の目的は、「趣味の人々」に会うためだった。横浜の齋藤昌三、加山道之助、東京の三田平凡寺である。「趣味」とは蒐集や民間での学問等を含む当時の流行語でもあった。齋藤は書誌研究者、加山は横浜市史編纂者として、後世に名を残している。また兩人とも郷土玩具、燐票（マッチラベル）など、所謂「ガラクタもの」の蒐集家・研究者としても

第一人者であった。二人はこの年に郷土研究誌『おいら』、その後『いもづる』を創刊する。創刊にあたり、「一口に『いもづる』という、薩長の官僚派や、サーベル党の強いて作った腐れ縁のやうに思われるがそうではない、帰する所は同じ趣味海に落ち合ふ同志である」と。当時の趣味人には「権力」や「中央集権化」に抗う気分があったようだ。『いもづる』は無料配布され、全国に趣味人のネットワークを作っていた。

三田は「奇人・珍品蒐集家」として高名で、「我楽多宗祖」を名乗り、全国趣味人の元締め的存在。彼の弟子には、福井の松平康莊侯爵、米国の人類学者スタールや建築家のレィモンドなどもいた。

松井はまず加山に会い、五車堂（東京神田の輸入商）へ齋藤を訪ねている（写真A）。「氏は同社の支配人也」と。宗主・三田へは、二人の付き添いで訪問。三田は聴力を失っており、筆談を交わした。そのときの紙片が松井の帳に残っている（写真B）。

翌二十日には、寺社参拝記念の千社札の交換会が齋藤宅で催され、松井も参加している。帳には、このときに交換した沢山の札が貼ってある。その中に岡崎康生の稲垣豆人（写真C）。稲垣は趣味の同志で、同七年に松井と「岡崎趣味会」を発足させた人である。こうした京浜の趣味人達との交流は、昭和十年頃まで続くのである。



「みどりや主人の大正・戦前昭和」（嶋村博著、2024年3月10日発行、風媒社）より